

特集2 明治学院大学と岩手県大槌町との協働・連携の未来に向けて

本学はボランティアセンターを中心として、東日本大震災直後から多くの学生・教職員が被災地で活動を展開してきた。なかでも岩手県大槌町とは特別な関係を築いてきた。2012年3月に、明治学院大学と大槌町との間に「協働連携に関する基本協定書」が締結され、ボランティアセンターの活動の一環として数多くの学生が大槌町でのボランティア実践に参加してきたからである。2012年4月1日に発効したこの協定は、3年後の2015年に更新された後、2度目の更新が合意された。それを受けて2018年2月6日に、杉山恵理子ボランティアセンター長、波多野洋行次長、高橋千尋課長、この協定書の策定に関わり、その後も何度も大槌町を訪れて調査研究活動などを展開してきた浅川達人社会学部教授（キャリアセンター長）、中原美香ボランティアコーディネーター、そして2人の学生（社会福祉学科2年の佐藤さんと消費情報環境法学科1年の山本さん）とともに、私も初めて大槌町を訪れた。

私自身、故郷の水戸市滞在中に震災に遭い、実家が大規模半壊の被害を受けた。3.11後の数日間にわたる避難生活とその後の実家家屋再建という被災経験を通じて、津波被害の大きかった東北地方の被災地のようすがずっと気にかかっていた。にもかかわらず、これまで足を運ぶことができずにいた。今回の大槌町訪問は、本学／ボランティアセンターにとってのみならず、個人的にも大きな転機となった。

まず訪れた町役場で開催された連携推進委員会では、平野公三町長や関連部署の部長・課長などの方々に向けて、学生代表の2人が大槌町吉里吉里地区での活動を報告した。大槌町の方々からは、明学生との交流が子どもたちにとって大きな刺激になっているとの、肯定的評価のお言葉をいただいた。

その後に、明学側から今後に向けて、いくつかの提案をするかたちで協議を行った。浅川先生と杉山先生から、専門性を生かした調査研究や臨床支援の提案があったほか、波多野次長から滞在中の学生たちの移動手段としてレンタサイクルの利用、大学祭での大槌町特産品販売などが提案された。学生たちも、小学校低学年の子どもたちへの防災教育や高齢者への支援など、活動対象の幅を広げる可能性を提案した。大槌町側からは、町役場での学生たちのインターンシップのお話も出た。これらの提案の実現可能性は、継続して協議することとなった。最後に、松原学長からのメッセージを私が代読して、委員会は終了した。

会議冒頭の挨拶で平野町長が「震災から7年経って、ようやく目の前の再建だけでなく、多様なニーズに対応した支援に眼が向けられるようになった」と発言されたことが私の印象に残った。大槌町は今、転機を迎えているという。委員会後に、町のようすを視察させていただいたが、大槌駅の駅舎建設が始まり、その周辺の店舗や住宅の建設も徐々に進んでいる。吉里吉里地区の吉祥寺では、高橋英悟住職や芳賀博典（大槌町公民館）吉里吉里分館長のほか、地元の皆さんとお話する機会を得た。移設された公民館分館での学生たちの新たな活動が期待されているとのこと。その後、吉里吉里学園小学部と中学部を訪問し、本明校長および柳田校長と個別に意見交換させていただいた（吉里吉里学園中学部では学



吉里吉里学園中学部の柳田校長と
活動中の学生たちを訪問

習支援活動中の明学生たちにも会えた）。児童・生徒数の減少が顕在化する一方、震災の記憶のない子どもたちが入学してきており、新たな支援ニーズが生まれていることも認識できた。

復興が進む現在、町の長期的な将来展望の構築が課題になってきている。本学がそこにいかに貢献できるかが問われている。多様な次元での対話を通して、道を模索する必要があると感じながら帰途についた。

（副学長 野沢慎司）